池田満寿夫、もうひとつの愛

池

江苏工业学院图书馆
藏书章

池田満寿夫、もうひとつの愛

池依依（イーイー）

河出書房新社

池　依依（イケ　イーイー）

一九六二年、台湾に生まれる。八三年より、日本、フランスに美術遊学。九八年、国際芸術文化栄誉賞、全球華人藝術奨章受賞。現在、日本において絵画、彫刻、書を中心に創作活動を展開。また、身体障害者に車椅子を贈るチャリティー活動も続ける。中華芸文交流協会公関委員会副主任委員、新日本美術院理事。

池田満寿夫、もうひとつの愛

一九九八年七月一日　初版印刷
一九九八年七月一〇日　初版発行

著　者　池　依依
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話　三四〇四―一二〇一（営業）
　　三四〇四―八六一一（編集）
振替口座〇〇一〇〇―七―一〇八〇二

印刷　株式会社亨有堂印刷所
製本　大口製本印刷株式会社

© 1998 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4-309-01230-2

池田満寿夫、もうひとつの愛 † 目次

プロローグ〈一九九七年春〉 5
第一章　出会い〈一九九二年冬から〉 17
第二章　二人だけの空間〈一九九四年冬から〉 53
第三章　満寿夫が泣いた夜〈一九九五年夏から〉 83
第四章　別れ〈一九九六年秋から〉 123
エピローグ〈一九九七年夏〉 141
あとがき 153

装丁　中島かほる

装画・挿絵　池依依

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

池田満寿夫、もうひとつの愛

我が恩師、同志、そして恋人であった池田満寿夫に捧ぐ

プロローグ〈一九九七年春〉

熱海のホームに降り立ったとき、眩しいぐらいの太陽が頭上から襲ってきた。木々の芽が息吹く季節はもうすぐそこまできているのに、私は愛し、愛された男の密葬にひっそりと行かなければならなかった。心と頭の奥底は映像のないスクリーンのように、ただただ白かった。

黒い帽子、黒いドレス、黒いハンドバッグ、そして黒いサングラス。

バッグの中には男が愛用したサングラスをしのばせていた。二人して出かけるときに必ずかけていたものだった。

男の立場を考えると二人が一緒に食事をしたり、お茶を飲んだりするなどというこ

とは、決して許されることではなかった。深夜、または夜明け前、誰も通らない静まり返った表参道を歩いたり、電灯一つ灯らない部屋で短いときを過ごす二人に多くの言葉はいらなかった。

私はいまだに男が自分一人を残し、この世を去っていったことに実感を持つことはできなかった。

満州生まれの男が、台湾出身である私に教わった言葉を電話で言う。

「依ちゃん、老太太、在不在？（歳とったお嬢さん、いますか？）」

子供のように他愛のない冗談を普段から口にしていた。私は熱海の駅に降り立ったいまでさえ、この密葬が、そんな男の実に巧妙な悪戯だとしか思えず、くしゃくしゃの髪を掻きながら、ふらふらと改札口に歩み寄る姿を、温泉客で賑わう駅舎の向こうに探そうとしていた。

二人は冷静に自分たちの愛を確認し合っていたし、誰一人として傷つけることなくひっそりと育んできていた。叶わぬ愛だからこそ、些細なことで関係が無になるよう

なことがないように充分に気を遣い温めてきたものだった。なのに……。

足に力が入らずふらつく。バッグの中にあるサングラスをぎゅっと握り締めていた。

男と女が出会った偶然が、必然に変わる途中で終わってしまった。

私は一人で歩かねばならなかった。

この駅からも、これからの人生も。

〈故池田満寿夫儀密葬儀式場〉

白と赤紫色の花に埋め尽くされた斎場前の階段で、私は立ち尽くした。愛する男がこの中に横たわっている。

招かれざる者としてこの場に来た私には、太陽が眩し過ぎた。

偉大な芸術家としてその名を世界に馳せ、日本という枠におさまりきれなかった池田満寿夫という名の男は、芸術という世界に身を置きながら俗世界を垣間見て、我が身の置きどころを求めて私のもとへ通う日々があった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

死の直前の、満寿夫からの電話が頭をよぎる。

「もっと、もっと、いい作品を、描いてください。自分の、感性を信じ……。もし、僕の、体が駄目に、なったときには……僕の、代わりに、描き続けてください……」

満寿夫が遺した途切れ途切れの言葉が胸をえぐった。

そして、最後の言葉が、

「ありがとう」

これから先、否定され続けるであろう私の存在を、満寿夫は気遣い死んでいった。胸を張らなければならない。人を愛するということは罪ではないはずだ。それに二人の関係は男と女の間柄に止まらず、もっと心の奥底で繋がっていたものなのだから。

他人にはいつまでも理解されないであろう濃密な時間を終わらせるために、私は彼の面前に立ち、自分なりの決着をつけなければならない。どんなに好奇の目で見られようとも、満寿夫の女として、唯一の弟子として、ともに筆を持った同志として、この場で別れを告げなければならないのだ。

階段を上り始めた。
心と裏腹な真っ青の空に、千切れた雲が頼りなく漂う。
春はもうすぐそこにきていた。
私は彼が横たわる棺へと向かった。

思い切って斎場に入ると立ちくらみに似た暗闇が一瞬目の前に広がった。静けさの中で無意味なざわめきが耳を刺激する。
ようやく室内の明かりに目が慣れると、思ったより少ない人しか参列していないことに驚いた。
右手には報道関係の人々がいた。生前、彼を悩ませ続けた人たちに何も言う気はないし、祭壇に向かう途中、幾度かフラッシュがたかれたが顔を隠すことさえ億劫に思えた。
もう、何も気にする必要はなかった。サングラスをかけたり、帽子を目深に被った

りして顔を隠そうとする気力がなかったと言うべきだろうか。愛する人が亡くなってしまった以上、失うものがあるはずがなかった。

赤い服を着てくればよかった……。そんな考えが一瞬頭をよぎる。

満寿夫は以前、「赤い服の女」というタイトルのモチーフを私になぞらえて、引っ張るようにデパートへ連れて行ったことがあった。

「赤いジャケットと、豪華で真っ赤な帽子を買おう。きっと似合うよ。あの絵のイメージは依ちゃんに捧げます」

法外な値段の赤い服、そして真っ赤な花をふんだんにあしらった帽子を買ってくれた。そして満寿夫は、

「僕も画家であり芸術家。依ちゃんも女流の画家。葬式は真っ赤な服とかがきっと似合うはずだよ。普通の葬式はやめにしようね」

そう言って悪戯っぽく笑っていた。

「依ちゃんはどういうセレモニーがいいの？　自分の葬式に対してだよ」

「私は大好きなクラシックをかけてもらえればいいなあ。それだけで充分。でも延々とかけ続けて欲しい」

もう二年も前のことだった。

周りからどんな目で見られてもいい。気が狂ったと思われようがかまわない。あの、買ってくれた真っ赤な服を着てくればよかった。一歩一歩祭壇へ近づく度にその思いは強くなった。

私は祭壇の前まで来て立ちすくんだ。微笑む満寿夫の写真の横にある文字に初めて気がついたのだ。

〈天女乱舞〉

震えが走った。

薄紫色の胡蝶蘭に彩られた向こうの金屏風には、作家の澁澤龍彦氏のために描いた絵とともに、確かにそう書かれていた。

名も知らぬ春の花に二人がつけた思い出の名前。その神秘に取りつかれ、作品の対

象以上に女体というエロスを求め続け、芸術という場において格闘を続けてきた男にふさわしい言葉。何気なく笑ってつけたあのときの〈天女乱舞〉を、いまこの場で目にしようとは思いもよらなかった。

見下ろせば起き上がることのない満寿夫の亡骸が穏やかな顔をして目を閉じている。

報告しなくちゃ、早く。そうしないと終わらないんだ。

私はちょっとしたはずみで遠くなっていきそうな気持ちを必死でこらえ、渾身の力を振り絞り念じた。

〈私は自分のイメージの世界として、馬の肉体と女体をテーマに新しいものに突き進んでいきます。そして約束します。あなたに成り代わって筆を持ち続けることを〉

これが精一杯だった。

永遠の別れである。掛け値のない、終わりである。

遺体の胸のあたりは、急性心不全のためか痛々しいほど膨れ上がっていた。

そして左頬の横に、そっと花を添えた。今日初めての涙がひとしずく一緒に棺にお

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.